
七夕のラブソディー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

七夕のラブソデー

【Nコード】

N6628J

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

心根はいいが破天荒な青年弘樹。彼が七夕に恋人の麻美に届けるもおとは。夏のあの日の恋愛ものです。かなり型破りな主人公が活躍します。

第一章

七夕のラブソディ

茶色にした髪で耳まで隠して女の子でいうシヨートにしている。

黒い眉は見事に斜め上にそれぞれ細く伸びているがその下にある強い光を放つ目はやや垂れている。大きめの鼻にこれかた大きめの引き締まった口元。背も高く外見だけ見れば実にいい感じである。

この彼薬師弘樹は学校ではそこそこ美男子で通っている。しかしそれ以上に奇人変人として学校内でその名を轟かせているのである。「私の何処が奇人変人なのだ」

「まずはその一人称何とかしろ」

「高校生で私なんて使うな」

クラスの中でいきり立っているとすぐにクラスメイト達に突っ込まれる。

「大体御前の喋り方が変なんだよ」

「しかも何だ？おかしなことばかりするだろ」

「おかしなこととは」

「行動自体がだよ」

それがそもそもおかしいというのである。

「何をするにしてもな。突拍子もないしな」

「そんなのだから歩く時限爆弾って言われるんだよ」

「むう、私は時限爆弾だったのか」

腕を組んでそのことについて考える。自覚なぞ全くしていなかった。

「それは心外だ」

「心外じゃあねえだろ」

「顔はいいし成績も上々なのにな」

「しかも性格自体も悪くないしな」

そういうところは別に何の問題もないのだ。ただ奇人変人である

というだけである。

「これで普通人だったらな」

「学校も平和だったのにな」

「私が学園の平和を守っているのだ」

こんなことを言うこと自体がおかしいということには気付かない。

「その為に日夜分かつたぞだな」

「大騒動起こしてるんだな」

「昨日は掃除しててあれだったよな」

クラスメイト達はまた彼に突っ込みを入れる。

「猫が魚を啜えていたとかいって盗まれたものを取り戻すとか言つてな」

「校長室に飛び込んで大立ち回りやっただろ」

「あれはだ」

彼はクラスメイト達が言う昨日のことについて釈明をはじめた。

「あの猫が校長室に逃げ込んだからだ。だから私はあの猫をモップで成敗しようとしてた」

「で、そこにいた校長先生の頭にモップやって」

「鬘を吹き飛ばしたんだな」

「まさか鬘をしているとは思っていなかった」

とはいってもその顔は平然としたものである。

「しかしよく飛んだものだ、あの鬘も」

「それで猫は逃げて」

「校長先生の鬘疑惑が皆の確信になったな」

この話は前からあったのである。しかしそれを公にしてしまったところに彼の罪がある。流石にこれは洒落にならない話である。

「大体お魚啜えたドラ猫つてよ」

「サザエさんか？」

国民的ドラマの一つである。

「しかも校長室まで飛び込んでよ」

「無茶苦茶になったな」

「それで五日前は」
まだあるのであった。

「何でプールに飛び込んだんだ？」

「それでよ」

彼等はその時のことも言うのだった。

「一応聞くけれどよ」

「何でなんだ？」

「あれはだ」

そのプールに飛び込んだ理由を自分から話す弘樹だった。

「プールの中に何かが見えたからだ」

「何かって何だよ」

「それが問題なんだけれどな」

「ミズカマキリがいたのだ」

それがいたというのである。所謂水棲昆虫である。

「タイコウチもいた。貴重な水棲昆虫がこのままでは子供達に捕まりいじめられると思ってた」

「それで保護する為にか」

「プールに飛び込んで逃がそうと思ったんだな」

「左様」

まさにその通りだというのである。

「結果としてそれは成功に終わった」

「それで濡れ鼠で授業を受けたのかよ」

「全く」

「風邪はひかなかったぞ」

胸を張って言う。

第二章

「だからよしとすべきだ」

「やれやれ。こいつだけはどうしようもねえな」

「手がつけれねえ」

理由を聞いてお手上げといった顔になるクラスメイト達だった。

「麻美ちゃんも大変だよ」

「全くだぜ」

そしてこう話すのだった。

「何でこんなのと付き合うのかね」

「っていうか付き合えるんだ？」

今の言葉の訂正は微妙に弘樹に対する感情が見られるものであった。

「ややこしいなんてものじゃないのにな」

「時限爆弾と一緒にな」

「そうだ、麻美ちゃんのことだ」

言われるとだった。それで思い出した弘樹であった。

「もうすぐ七夕だな」

「ああ、そうだよ」

「織姫と彦星の日だよ」

まさにその日だと答えるクラスメイト達であった。とはいっても内心弘樹がまたしでかすのではないかと思いつながら話を聞いている。

「それがどうしたんだ？」

「普通の七夕にしろよ」

「よし、やるぞ」

クラスメイト達の話は聞いていない。やはりこの辺りが実に奇人変人である。

「この世に二つとない七夕にするのだ」

「やれやれだな。また騒動か」

「この変態だけはどうにもならねえな」

今度の変態である。弘樹も随分と言われるものである。

「まあ麻美ちゃんには迷惑かけるなよ」

「言っても無駄だろうがな」

言葉は投げやりであるがそれでもその麻美のことを考えてはいるものだった。

「さて、何をしでかすやら」

「本当に困った奴だな」

そんな話をしながらこれから何をしでかすのか見守る彼等だった。果たして彼は動いた。

「決めたぞ」

「一人で決めるな」

「人の話を聞け」

皆の突っ込みも当然耳に入らない。

「麻美姫、私は貴女に最高の七タイプを捧げよう！」

「七タイプ!？」

「何だそりゃ」

皆が眉を顰めさせる中でそれははじまった。その時麻美は彼の話聞いてまずは苦笑いになるのであった。

麻美は少しふつくらとした顔立ちの女の子で目は垂れ気味である。口ははつきりとしていて大きめである。笑顔が零れそうであり肩のところまで切り揃えた黒髪がいい。柔らかそうな頬である。

背は普通より少しばかり高い程度だ。肉感的な身体だが決して太ってはいない。制服からもそのスタイルがよくわかる。そんな女の子である。

彼女は弘樹の隣のクラスにいる。入学式でいきなり告白され唖然とした中でそのまま勢いに負けてしまつて交際となっている。彼に完全に振り回されているが実は悪い気はしていない。そんな女の子である。

その彼女が七夕に向けて弘樹が何かをはじめたと聞いて。まずは

周りに聞いた。

「それで何をするのかしら」

「わかるわけないでしょ」

「あの奇人変人さんのやることは」

女の子達は顔を顰めさせて彼女に返した。

「今まで斜め上に突き抜けてばかりなのに」

「今回もそれに決まってるけれどね」

「斜め上なの」

「だからわからないの」

「あいつが何をするかは」

彼女達はその顰めさせた顔のまま話す。

「それこそ爆弾が歩いていているようなものじゃない」

「何したっておかしくないわよ」

「何したって。そうよね」

これは麻美が最もよくわかっていていることだった。

「端午の節句じゃいきなり家に鎧兜で来たし」

「それはわかるわ」

「とりあえずね」

女の子達もこの奇行はわかるとした。

「そうしたお人形出すからね」

「雛祭りと対比で」

「しかも馬に乗って来たし」

この辺りが弘樹の弘樹たる由縁であった。

第三章

「お父さんもお母さんも啞然としたわ」

「そうでしょうね」

「それはね」

啞然としない方がおかしい話であった。

「それでプレゼントは奇麗な絹の反物だったのよ」

「絹のって」

「何でそれなの？」

「ほら、弘樹君のお家って大きな呉服屋じゃない」

その御曹司というわけである。ついでに言えば彼は華道や茶道もしていてその道にもかなり通じていたりする。行動以外はかなりできていると言つていい人間なのだ。

「だから。それでなのよ」

「反物プレゼントって」

「しかも絹の」

「もうお母さん大喜びで」

麻美はこのことも皆に話す。

「だからあとはもうお母さんは絶対に彼と一緒になれってまで言うのよ。お父さんもね」

「でしょうね。プレゼントに絹って」

「普通ないから」

皆言うのだった。

「まあそれで七夕だけれど」

「今度は何をしでかすのかしらね」

「それがわからないから聞いているのだけれど」

また苦笑いになって皆に言う麻美だった。

「一体全体」

「七夕っていうとやっぱり」

「織姫と彦星？」

「それよね、やっぱり」

皆腕を組んだり首を捻ったり人差し指を振ったりしながら話す。

「一年に一度しか会えないそんな日」

「ロマンチックではあるけれど」

「そのロマンチックもあれにかかったら」

最早あれ呼ばわりであつた。

「どんな滅茶苦茶なものになるやら」

「想像できないわよね」

「七夕までのお楽しみかしら」

皆の話聞き終えてこう呟いた麻美だった。やれやれといった感じであるがそれでもそこには幾分か余裕も見られる、そんな呟きだった。

「これはね」

「何かんだで期待してる？」

「それで楽しんでる？」

「まあそうかも」

自分でもそれは少しだけ認めるのだった。

「だって私の為にしてくれるんだし」

「まああんな性格だけれどね」

「行動は滅茶苦茶だけれど」

しかし、なのだった。ここが弘樹なのである。

「あんたを好きなのは間違いないしね」

「それはもう一発でわかるわ」

「どうなるかしら」

また言う麻美だった。

「今回は」

「まあ何が起こっても受け止めるしかないし」

「七夕まで待つしかないわね」

これが結論だった。そうして話を終えた。そして運命の日が近付

くのだった。

その間弘樹は何と自分の大きな家の庭に竹を一本入れていたのであった。

実に見事な竹である。青く笹も豊かだ。その竹を前にして仁王立ちして言うのであった。

「まずはこれだ」

「あれ、お兄ちゃんまた何かするの」

家のその木の渡り廊下から小さな女の子が見ている。何処かの雑誌に出て来そうな可愛らしい感じの女の子だ。中学に入ったばかりであろうか。

「今度は何するの？」

「知れたこと。七夕だ」

その妹に背を向けたまま言うのだった。彼の左手には見事な色と大きさの錦鯉達が泳いでいる池があり庭の縁には豊かな緑を見せる木々がある。後ろは二階建ての黒いまさに日本の屋敷がある。彼が御曹司であることはそうした周りからでもわかることであつた。

「だからこれを捧げるのだ」

「ああ、七夕だからね」

「左様」

妹に対して言い切る。

「姫にこれを捧げるのだ」

「姫って麻美さんのことよね」

「そうだ。やがて私の生涯の伴侶となるべき人だ」

勝手に決めていることである。

第四章

「あの方にこれを捧げるのだ」

「笹だけ？」

「無論違う」

そうではないというのであった。

「この笹を飾りそのうえでだ」

「御願いごとの短冊も飾るのね」

「当然だ。それを飾らずしてどうする」

そしてさらに言うのであった。

「愛美よ」

「うん」

妹の名を呼んでの言葉であつた。

「七夕とはまさに日本のクリスマスなのだ」

「そうだったの」

「左様、だからこそ笹をこれ以上になく美しく飾るもの」

少なくとも彼はそう考えていたのであった。

「さながらクリスマスツリーの様いだ」

「そういえばお兄ちゃん十二月になったらお店の前に大きなツリー出すわよね」

なお呉服屋である。それでも彼は出すのだ。

「それで今もなのね」

「そうだ、この竹は姫に捧げる」

右手を拳にして今言い切った。

「今から私はその為に彦星となろう！」

「それで麻美さんは織姫なのね」

「運命により一年に一度しか出会えぬ二人」

彼は織姫と彦星の話そう解釈しているのである。

「その運命の日だ！」

「また何かするの」

「左様、我が妹よ」

ここでその愛美の方を振り向くのだった。そのアイドルでも通用する美少女の方をだ。

「御前はそこで見ているがいい」

「それだけでいいのね」

「私は今より彦星となり大きなことを実現させるのだ」

「滅茶苦茶なことじゃなくてね」

「愛とは何か」

言っていることは既に滅茶苦茶である。ただし本人に自覚はない。

「誠とは何か」

「また随分古い漫画のこと言っわね」

「永遠の名作だ」

梶原一騎、ながやす巧の作品である。何処までも愛とは何かを追求した恋愛小説の不滅の名作である。週刊少年マガジンである。

「その通りに私もまた」

「言っても止まらないからそういうことは言わないけれど」

流石に妹だけあって兄のことはよくわかっていた。

「とりあえず麻美さんの迷惑にはならないようにね」

「御前の義理の姉となる人だ」

「それもう決まったの」

「私の中では決まっている。そう、あの出会いは運命だったのだ」
やはり言っていることがかなり滅茶苦茶である。既に竹を前にしている時点だ。

「では今から取り掛かるう。この竹を究極の七夕の竹にするのだ」

「短冊とか飾り作るのなら手伝っけれど」

「それもいい」

妹のこの申し出を断ってしまった。顔を竹に戻している。

「全て私がやる。姫の為に！」

「まあ頑張ってね」

こうして彼は竹と向かい合った。そうしてそのうえで鍔や色紙を用意して紙の鎖や短冊、星やそういった飾りをつけていく。忽ちのうちに鮮やかな様々な飾りで覆われた竹が完成したのであった。

その竹を見てまずは満足する弘樹であった。

「よし、これで完成だ」

「それでどうするの？」

完成された竹は庭にあり続けている。満足した顔で見ている兄にまた突っ込みを入れた妹であった。

「その竹を。どうするのよ」

「どうづるか？決まっていることだ」

腕を組み胸を張っての言葉であった。

「捧げるのだ。姫に対して」

「プレゼントするのね」

「今から行く」

彼はまた言った。

第五章

「そう、今からだ」

「今からって？」

「知れたこと。今日は何の日だ」

「七夕だけれど」

その運命の日である。織姫と彦星が会えるその日である。

「まさかそれで？」

「左様、私は行く！」

またしても断言であつた。

「今より姫の下へ。この短冊を持つてだ！」

「ええと、確か麻美さんのお家って」

「ほんの三十キロ先だ」

それ位離れているのである。中学校までは別々であり高校の入学式で知り合った。それがまさに運命の出会いだったというわけである。

「では今から行つて来る」

丁度時間は夕刻である。

「それではな」

「それではつて。三十キロ先よ」

まずはそこを突つ込む妹だった。

「どうやって行くのよ」

「自転車というものがある」

それを話に出してきたのであつた。

「それで行けば三十キロなぞどうともないことだ」

「いや、どうともあるわよ」

また速攻で突つ込みを入れた愛美だった。渡り廊下から兄を見るその目は流石にかなり驚き呆れたものになっている。当然と言えば当然である。

「三十キロっていったら」

「何、ほんの三時間で着く」

しかし彼は妹の言葉を聞いてはいなかった。

「三時間もかからないかもな」

「どうしてもそれで行くのね」

「そうだ。それではだ」

早速その竹を手取る。そのうえで右肩に担ぐ。その細い外見から想像もできないまでに力が強い。軽々とさえた手の感じである。
「参る」

「車には気をつけてね」

止められないのはわかっているのでこつ言っただけだった。

「くれぐれもね」

「わかっている。それではだ」

こつして天の川を超えに出陣する彦星だった。屋敷出る自転車の速さは想像を絶するものだった。竹を担いでいるとは思えないものがあつた。

「あれだけ無闇やたらに情熱的に愛することができると」

妹は家の門からその兄の消えている後ろ姿を見て呟いた。

「凄いことは確かだね」

そう言つて認めることは認めるのだった。呆れてはいるが。

弘樹は駆けていた。その速さは尋常なものではなかった。

「いざ！」

全速力で道を進んでいく。まさに疾風である。

「姫の下へ。参る参る！！」

叫びながら突き進む。周りはその姿を見てまずは啞然であつた。

「何だ！？竹が動いている！？」

「走つてるのか！？」

竹が大きく彼の姿を隠してしまうのでそう見えるのである。

「何なんだ、あれは」

「七夕だから！？」

「だから竹!？」

それはわかるが竹が異様な速さで動いているのは納得できなかった。啞然とした顔でそれを見守り道を開けることしかできなかった。

「何なんだ、あれは」

「何か自転車に人が乗ってるけれど」

それには気付いたのだった。

「けれど何であんなに急いでるんだ？」

「七夕にしろ」

それが何故かは他の人達にはわからなかった。あくまで弘樹だけがわかることだった。弘樹はそのまま麻美の家に一直線に駆けていく。

[illegible]

絶叫さえする。そのうえで何とバイクの一団を抜いてしまった。

「竹に抜かれた!？」

「嘘だろ！」

ライダー達もこれには啞然だった。

第六章

「ナナハンを自転車で抜くか!？」

「化け物かよ！」

驚きのあまりその背中を見ることしかできなかった。弘樹の自転車はバイクを抜き去りありとあらゆる常識を無視してさらに進むのだった。

彼が突き進んでいるその頃。麻美は自分の家で穏やかな夕食を採っていた。

父はまだ帰っておらず母と弟の三人でテーブルに座って食べている。白い御飯に鶏肉を人参や蓮根と一緒に煮たもの、それに味噌汁とほうれん草のバター炒めといった献立であった。

それを食べながらだった。母が麻美に言ってきた。

「今日だけれど」

「七夕よね」

「それで弘樹君からは何かあったの？」

「こう娘に尋ねてきたのである。」

「彼からは何かあったのかしら」

「いえ、なかったけれど」

そのことを母に対して答えるのだった。その手に白い御飯が入ったお椀とお箸を持ちながら。

「何もね」

「あら、意外ね」

それを聞いて目を少し丸くさせる母だった。

「あの子が何もしなかったなんて」

「何か考えてるらしいけれど」

どうも不安と期待が入り混じってしまっている麻美だった。

「それが何かまでは」

「わからないのね」

「七夕は夜が本番だし」

今がその夜であった。麻美曰く本番の。

「これから何かあるか」

「そうよね。弘樹君のことだから」

彼の突拍子なさは母親もよくわかっていた。最早それがトレードマークにもなっていた。

「何をしてくるのかわからないわよね」

「覚悟はできてるわ」

もうそれはしている麻美であった。

「それはね」

「いい心掛けね」

半分以上平時において言う言葉ではなかった。戦争状態において言う言葉に近かった。

「それはね」

「ええ。本当に何をしてくるのかしら」

「それが問題ね」

「何が来てもよ」

麻美はほうれん草のバター炒めを自分の皿に採りながら強い声で語る。

「準備はできてるわ」

「偉いつ、それでこそ女の子よ」

母の言葉はここでも相当なものがある。

「男の子と付き合うのにはね」

「覚悟が必要なの」

「そうよ、何が起こってもそれを受け止めてそのうえで立ち向かう」
やはり平時の言葉ではなくなっている。

「それが女の子だからね」

「ええ。それじゃあ」

「受け止めるのよ」

また告げる母だった。

「わかったわね」

「ええ」

麻美は母の言葉に頷く。

「わかったわ」

「それでだけれど」

ここで弟が言ってきた。

「弘樹さん何時来るの？」

「それがわからないのよ」

そう言われると困った顔になる麻美だった。

「今来るか真夜中になるのかね」

「今のうちにお風呂入っていないさい」

このことを娘に告げる母だった。

「今のうちにね」

「もう入っておけっていうの？」

「そうよ。だから何時来るかわからないからね」

何につけてもそれであった。何時来るかわからないのならば今のうちにやるべきことを済ませておく。その言葉は合理的であった。

第七章

「そういうことだからね」

「わかったわ。それじゃあ」

母の今の言葉にも頷く麻美だった。

「御飯食べたらずくにね」

「そうしなさい」

そう話して御飯を食べ終えてすぐにお風呂に入るのだった。幸い入浴中に破天荒な来訪者は来なかった。その頃破天荒な来訪者となる男は何をしていたかというところがない。

相変わらず全速力で自転車で駆けている。その速さは収まるところがない。

その右肩に派手に飾った大きな竹を持ったまま駆けていく。そして橋の上に来たところで。

「見えた！」

いきなり叫びだしたのである。

「翼よ、あれが姫の灯だ！」

翼なぞ持つていなくともそれが見えているのである。

「いざ、あの灯へ！」

こう叫んでさらに足を速める。そして遂に。

跳んだ。白い満月にそのシルエットが浮かぶ。自転車に乗り竹を持ったまま天高く舞うその姿がだ。月の中に映ったのであった。

そのまま跳び麻美の家に着いた。何と天を舞いそのうえで家の庭に着地したのである。

「まさか」

ここで丁度お風呂から出て着替え終えた麻美は庭から聞こえてきた凄まじい衝撃音で察したのだった。

「来たのね」

「姫！」

間違いなかった。この呼び掛けが何よりの証拠であった。

「何処におられる！姫！」

「姫じゃないわよ」

まずはそう突っ込みを入れる彼女だった。何とか上着を着てスカートもはく。着たばかりなので服に乱れはないのか確かめたうえで庭の方に向かうのだった。

するとだった。自転車に乗った彼がいた。その右肩には竹を持っている。

「姫、参上つかまつた」

「姫っていうとまさか」

「そう、今宵は七夕」

やはり話の根拠はそこにあった。夜の庭に出て来た麻美に対して告げてきていた。

「だから織姫に対して」

「私が織姫なのね」

それはもう嫌になるまでにわかった。言われずともだ。

「つまりは」

「その織姫に捧げるものは」

「何なの？彦星さん」

呆れながらも彼を受け止めて合わせる麻美だった。

「それで」

「これを」

自転車からゆっくりと降りてだ。そのうえで今まで右肩に持っていた竹を両手に持って。そのうえで麻美に対して捧げてきたのである。

「どうぞ」

「竹がプレゼントなの」

「小宵は七夕」

またここでこのことを言う。

「だからこそこの竹を」

「私へのプレゼントなのね」

「嫌だったら」

「いいわよ」

微笑んで彼に返すのだった。

「それ、弘樹君のお家から持って来てくれたのよね」

「左様」

まさにその通りだと答える彼だった。

「持って来た。これを」

「弘樹君のお家から私のお家まで随分とあるけれど」

彼女もよく知っていた。彼の家まで行ったことも何度かあるからだ。だからよく知っているのである。

「そこからわざわざ持って来てくれたんだし。私の為に」

「有り難う」

微笑んで彼に告げた言葉である。

「持って来てくれてね」

「受け取ってくれるのか、これを」

「だから有り難う」

この言葉に全てが集約されていた。

「私の為にね」

「かたじけない」

このことを心から喜ぶ弘樹だった。

第八章

「それでは」

「ええ、じゃあ」

その弘樹の手から竹を受け取る。その時に短冊に気付いた。七夕にはお決まりの願い事を書く短冊である。そこにはこう書かれていた。

『麻美ちゃんが何時までも幸せでありますように』

『麻美ちゃんの家族の人達は何時までも仲良くありますように』

『麻美ちゃんがずっと健康でありますように』

『麻美ちゃんの周りの人達が皆いい人達でありますように』

『麻美ちゃんが永遠に笑顔でいられますように』

世界平和やそうしたこと書かれているが目立つのは彼女についてのことだった。自分自身のこととは全く書かれていなかった。

その短冊を見てだ。麻美はうつすらと笑ってこう言うのであった。

「だから好きなのよ」

うつすらとであったが温かい笑みであった。

「こうだからね」

「今何と」

「好きなのよ」

その言葉を彼に対しても隠さなかった。

「弘樹君が」

「私のことが」

「そうよ。好きよ」

夜の月明かりの中で微笑んで彼自身にも告げた。

「大好きよ。ずっとね」

「有り難い。その言葉こそが」

「ずっと一緒にいましょう」

麻美は彼にさらに言うてきた。その両手に彼の心がそのまま込め

られた竹を持ちながら。

「ずっとね」

「そうだ、私達は何時までも一緒だ」
その弘樹も言う。

「この七夕に誓って」

「ええ。それにしても」

ここで上をちらりと見るとだった。麻美は気付いたのである。

「見て、弘樹君」

「何が」

「ほら、お空だけね」

彼に空を見上げるように告げたのである。

「お空。見て」

「むっ!？」

彼女の言葉を聞いて彼もまた上を見る。するとだった。

白い満月の他に天の川もあった。それは空を奇麗に流れていた。
無数の星達の瞬きがそのまま濃紫の空に流れていた。

「天の川……そうか」

「そうよ。七夕だからね」

「美しい」

彼もまたその美しさに見惚れた。

「何か心が洗われるようだ」

「そうよね。とてもね」

二人でその天の川を見ながらの言葉だった。

「この天の川もずっとね」

「見よう」

また二人で誓い合うのだった。七夕の騒動は最後は静かに幕を降ろしたのであった。それまでの騒動がまるで嘘であったかの様に。

2
0
0
9
·
1
1
·
9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6628j/>

七夕のラブソディー

2010年10月8日15時24分発行